様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６８９５

研究課題名（和文）レバノン高齢社会の人類学的研究―親族・国外移民・家事労働者

研究課題名（英文）Ageing Society in Lebanon: Kinship, Migration, and Foreign Domestic Workers

研究代表者
池田　昭光（IKEDA, AKIMITSU）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：１０７２５８６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題では、高齢化がアラブ諸国の中では最も進展していると考えられるレバノン共和国において、高齢者施設などでの参与観察および聞き取り調査を中心に研究を行った。
　その結果、公的な支援では充分な対応ができず、ゆえに同国の様々な宗派集団が基盤となって高齢者関連の施設を設置・運営する様子が浮かび上がってきた。他方で、親族間での高齢者ケアに対する強い志向性が意識の上では根強く、若年層の海外移民との間でジレンマになる局面もあることが認められた。
　研究成果については、論文、口頭発表を通して行い、アカデミズムの内外双方で成果還元を行うことが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、高齢化について、次第に進展しつつも全体的にはそれほど研究の進んでいない中東地域において、レバノン共和国におけるフィールドワークによって、具体的な側面から実態を調査した点で学術的な意義を有している。
　また、日本語による情報が限定されている同国の社会的側面の一端について行った研究という点では本邦に知的情報の多様性をもたらす意義がある。特に、一般読者向けのエッセイを通してそうした知見を社会還元できたことには大きな意味があろう。

研究成果の概要（英文）：This project have conducted the research mainly on ageing process in Lebanon which is considered to show the highest ratio of the elderly among the Arab countries through anthropological fieldwork.
The research shows that various confessional groups have been involved in taking care of elderly people through confessional-based institutions. This is due to the lack or insufficiency of the aid from public sector. Also, due to the persistence of kinship ideology to take care of the elderly by its members, especially young generation who try to migrate often feel social conflict between their future career and care of their parents.
The research results became opened through publications and oral presentations, in order to have the results open both to the academic and non-academic audiences.

研究分野：文化人類学

キーワード：レバノン　高齢化　老年人類学

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、代表者がこれまでに参加したレバノン移民に関する科研費プロジェクトで得られた知見をもとに、国外への移住が活発なレバノン共和国において、移民を送り出した地域に残される高齢者や、移住先で老いた高齢者については等閑視されてきた点を問題とし、移民研究の延長上に高齢化の問題を位置づけることを意図していた。

他方、近年のレバノンでは、同国の高齢社会の進行が少なくとも学術的には指摘されるようになっており、アラブ諸国の中で高齢社会の様相をもっとも強く呈する国であると考えられていた。

そこで、本研究により、高齢者のケアを誰がどのように行うのかについて、移民現象との関わりから調査し、同国の高齢社会を支える社会文化的な要因について明らかにすることを試みようと着想したのであった。

２．研究の目的

本研究課題では、他のアラブ諸国に先駆けて高齢化が進行しつつあるレバノンについて、人類学的なフィールドワークをもとに、その実態を理解するための基礎的な資料収集を行うことを当初目的とした。

高齢者のいる家庭を主に調査し、特に（１）親族によるケア実践、（２）高齢者の生活を形成する要因としての国外移民、（３）労働移民として到来したアジア諸国のメイドによるケア実践という三つの側面を検討することを重視した。

３．研究の方法

本研究課題については、人類学的なフィールドワークの手法を用い、首都ベイルートを中心に、レバノン各地にある高齢者関連施設・活動を訪問し、聞き取りおよび参与観察を通じて、高齢化の実態把握をする方法を採用した。

その際、

(1) 施設・活動を運営する人々、看護士等のスタッフ・ボランティア、施設の入居者・サービスの利用者、入居者・利用者の親族、など多様な部門を考慮しながら調査を行うことで、施設・活動をできるだけ多角的かつ総合的に把握するようにつとめた。

(2)高齢者のケアは親族関係や親族の観念と密接に関連する領域であるため、在外移民の存在、ケア手段の選択にいたる過程、親族によるケアを義務とするイデオロギーへの態度、家内労働者の役割など、レバノン社会の特徴が表われるであろう側面に重点を払うように努めた。

４．研究成果

(1) 本研究課題での調査研究を通じて、レバノン共和国における高齢者関連の施設を複数訪問し、その実態について資料収集を行えたことは大きな研究成果と言えよう。なかでも、宗派と高齢者施設との強い関連が浮かび上がってきたことは、当初の研究計画ではそれほど強く意識していなかったことであり、新たな知見につながる成果と言える。

すなわち、公的なセクターにおける社会福祉の機能が同国では限定的であるため、宗派が中心となって病院やデイケアセンター、レクリエーション活動などを設置・運営していることが明らかになってきた。また、こうした施設・活動に関わる聖職者へのインタビューからは、自宗派の高齢化について自覚的な認識を持っていることもわかってきた。

レバノン社会に関するこれまでの研究から、病院や学校については宗派的な基盤をもとに運営がなされていることは知られていたものの、社会福祉についても類似の論理が延長されているとわかったことがここでの研究成果と言える。

(2) 他方で、宗派を必ずしも前面に掲げない施設の存在も調査を通じて判明したことである。ただし、その場合であっても入居者が運営側と同じ宗教・宗派に偏る傾向が見られることは興味深い発見であった。つまり、宗教・宗派を超えた混淆的な状態で運営されている施設・活動というのは現状では見いだしがたいということである。世俗の中の宗派性というこの問題についてはさらなる検討が必要であるが、この問題はレバノンにおける公的領域の限界を示す（即ち、宗派的偏向があらゆる場面で見られる社会では公的セクターがそもそも成立しえないのではないかという問い）点で、今後の研究に貴重な示唆を与えてくれるだろう。

(3) 親族関係については、特に国外移住との関連で高齢者が大きな問題につながることがわかってきた。すなわち、親族間の結びつきが少なくとも理念上は強く、かつ、同時に、海外への移民も盛んなレバノンでは、年老いてゆく両親のケアが問題として浮上しやすい。20 代の若者が国外に職を求めようとしたとき、親の面倒を誰が見るべきかがしばしば意識に上ることがここでの調査から浮かび上がってきた。

なかでも興味深いのは、目の前の現実として登場してきている「高齢者施設・活動の増加」を前に、従来であれば忌避したような施設の利用を許容する言説が出てきていることである。「仕方がない」あるいは「こうした施設の方が専門家に見てもらえるからよい」といった表現

を通して、親族関係のイデオロギーとは異なる現実への対処が認められた。他方では親族間での高齢者ケアが必須であるとする観念も根強いが、観念と実践のバランスが今後どのように推移するのかが重要な論点であることがこの研究成果を通じて明らかになったと言えよう。

（4）アジア・アフリカ諸国からの移民労働者の役割については、当初予想したほどの大きな位置づけにはないということがわかってきた。大きな理由としては言語上の問題である。移民労働者としてやってくるアジア・アフリカ諸国の人々は、アラビア語レバノン方言については新たに習得しているため、高齢者をケアするに必要な細かなニュアンスまで習得することが難しく、そのため、密接なかかわりが発生するまでの段階には至らないと考えられる。
　他方、アラブ諸国出身の労働者の存在を発見したのはここでの調査を通じて新たに判明したことである。今回の調査では、エジプト、シリア、イラク出身者が高齢者施設で雇用されていることがわかった。これらの人々についてはアラビア語ネイティブとして高齢者と細やかなコミュニケーションを交わすことが可能であり、施設側にとっても貴重な労働力とみなされていることがうかがえた。特にイラクからの難民に対して若干ではあるが雇用の受け皿となることにより、高齢者施設が非高齢者に対しても社会福祉的な機能を提供することを示唆する資料が入手できたのは学術的に意義深いと考えられる。

（5）以上の知見、また、これらと関わる理論的側面に関する知見については、図書、論文、口頭発表を通じて成果還元を行った。特に「レバノンにおける高齢社会のフィールドワークから見えてきたこと」は、一般向けのエッセイとして書かれたものであるため、アカデミズムの領域を超えて、より広範な読者にアクセス可能な媒体での成果還元となった。これは、高齢化がすでに大きな社会問題となった本邦への知的貢献につながったと考えている。また、ワークショップ「老い――「問題」として、「経験」として」においては、他の中東地域を専門とする研究者を報告者に、日本やアフリカを研究対象とする研究者をコメンテータに迎え、学際的なワークショップの形で老いや身体の問題を公開討議する機会を設けることができ、特色のある成果公開になったと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　４件）

① IKEDA, Akimitsu, Sectarian Tension and Everyday Life: Case of Lebanon, Ryoko Nishii (ed.), Coping with Vertiginous Realities, 査読無し、14-18, 2018
② 池田昭光、レバノンにおける高齢社会のフィールドワークから見えてきたこと、FIELDPLUS――フィールドプラス――世界を感応する雑誌、査読無し、第 20 号、2018、20-21
③ IKEDA, Akimitsu, Around Boundaries: Everyday Interaction in a Lebanese Town. Proceedings of the Papers, Consortium for Asian and African Studies (CAAS) 7th International Conference, 査読無し, 2017, 113-118
④ 池田昭光、書評 Are Knudsen and Michael Kerr (eds.), Lebanon: After the Cedar Revolution、日本中東学会年報、査読あり、第 31 巻第 2 号、2016、361-364

〔学会発表〕（計　８件）

① IKEDA, Akimitsu, Sectarian Tension and Everyday Life: Case of Lebanon, ILCAA International Symposium “Coping with Vertiginous Realities”, 2018
② IKEDA, Akimitsu, Sectarianism Within and Without: Everyday Interaction in a Lebanese Town, World Congress for Middle Eastern Studies, 2018
③ 池田昭光、宗派の外部――レバノンにおける相互行為を事例に、日本文化人類学会第 51 回研究大会、2017
④ 池田昭光、宗派主義的社会と相互行為――レバノンのフィールドワーク資料の例から、日本中東学会第 33 回年次大会、2017
⑤ IKEDA, Akimitsu, Notes for a Research on Ageing Society in Lebanon: In Relation to Migration Studies, Seminar on migration studies, 2017
⑥ 池田昭光、趣旨説明　老い――「問題」として、「経験」として、フィールドネット・ラウンジ、2016
⑦ IKEDA, Akimitsu, Around Boundaries: Everyday Interaction in a Lebanese Town, Consortium for Asian African Studies (CAAS) 7th International Conference “Crossing the Boundaries: Asians and Africans on Move”, 2016
⑧ IKEDA, Akimitsu, Flexibility and Tension: A Case Study of Communicational Practice in a Lebanese Town, The 11th International Conference of Asian Federation of Middle East Studies Associations “World New Trends in the 21st Century and Middle East”, 2016

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。